

朝鮮語の活用を記述する2つの方法：「語基」と「語基式」学習書の検討を中心に

内山, 政春 / UTIYAMA, Masaharu

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

創刊号

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

2004-02-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002771>

朝鮮語の活用を記述する2つの方法⁽¹⁾

——「語基」と「語基式」学習書の検討を中心に——

内山政春

0. 本稿の目的

日本の朝鮮語学および朝鮮語教育では、朝鮮語の活用を記述するに際して「語基」という概念を用いることがある。しかしこの記述方式（以下「語基式」とする）は、朝鮮本国（韓国および北朝鮮）では現在まったく用いられていない⁽²⁾こともあり、日本国内においてさえ、朝鮮語学習者、さらには朝鮮語研究者にもさほど知られていない。さらには、日本で出版されている「語基式」教科書の「語基」に関する解釈も統一されているとはいえない。本稿は、「語基式」学習書の比較検討をおこなうことにより、かならずしも正しく把握されていない「語基」を正確に理解することを目的とする。

1. 朝鮮語の用言活用の3タイプ

朝鮮語は日本語と同じくいわゆる膠着語に属し、用言は語幹と語尾から構成される。そして語形変化、つまり語尾が交替することによってさまざまな文法的意味をあらわすのも日本語と同じである。

しかし語幹と語尾の結合に関して、日本語のいわゆる国文法と朝鮮語の学校文法⁽³⁾とではあつかいがことなる。日本語ではたとえば「読む」に各種の語尾がつく際に「読ま-ない、読み-ます、読む、読む-とき、読め-ば、読め」のように語幹を交替させる。この「読ま、読み、読む、読む、読め、読め」という交替をふつう活用という。一方朝鮮語では읽다《読む》の語形「읽는다, 읽느냐, 읽고, 읽어, 읽는, 읽기」は「읽-는다, 읽-느냐, 읽-고, 읽-어, 읽-는, 읽-기」のように語幹はつねに一定の形をとるものとされ、語幹と語

尾をあわせた全体の語形変化を活用と呼ぶ⁽⁴⁾。

このように朝鮮語の学校文法では語幹がつねに一定の形をとる（変格用言はこのかぎりではない。後述）かわりに、あるタイプの語尾は複数の形をもつものとして処理される。たとえば畔다《明るい》は「畔다, 畔으나, 畔고, 畔아, 畔은, 畔기」のように活用するが⁽⁵⁾、この中で「畔으나, 畔은」の語尾「-으나, -은」は母音語幹用言크다《大きい》の場合「크냐, 큰」のように「-냐, -ㄴ」となり、「畔아」の語尾「-아」は陰母音語幹用言적다《少ない》の場合「적어」のように「-어」となる。これらは学習書などでは通常「-(으)냐, -(으)ㄴ, -아/-어」などのように表記される。一方で、語尾「-다, -고, -기」はいかなる用言の場合でも形は一定である。これらは、以下のようにまとめることができる。

- ① つねに形が一定である語尾。 -다, -고, -기。
- ② 으を含む形と含まない形がある語尾。 -(으)냐, -(으)ㄴ。
- ③ 아を含む形と어を含む形がある語尾。 -아/-어。

朝鮮語の学校文法（以下「伝統式」⁽⁶⁾とする）では、用言語尾はすべて①、②、③のいずれかのタイプに属する。そして②と③に属する語尾は異形態をもつ。異形態が生じる理由は、으, 아, 어を語尾の一部としてあつかうためである。いいかえれば、으, 아, 어を語尾から切り離してしまえば、語尾は異形態を認める必要がないことになる。つまり「伝統式」は語幹はつねに一定の形を保つかわりに、語尾に異形態を認める方式である。

しかし考え方としては、으, 아, 어を語幹に含めることもできるし、語幹でも語尾でもない第三の要素とみることも可能である。裵株彩(1993)は現在までの朝鮮語研究史において通常媒介母音と呼ばれる으がどのように解釈されてきたかをめぐり、それらを、「伝統式」のように語尾の一部とみる語尾頭音説、語幹の一部とみる語幹末音説、語幹でも語尾でもない第三の要素とみる第三要素説の3つに分類している（ただし아, 어に関してはほとんど言及されていない）。本稿で述べようとする「語基」とは、裵株彩(1993)の語幹末音説に属する考え方である。「語基」の詳細に関しては後述することにし、以下ではまず「伝統式」と「語基式」の語幹と語尾を比較し、その考え方のちがいをみてみることにしよう。

2. 「語幹」と「語尾」

2.1. 正格用言の場合

前述のように、朝鮮語の用言語尾は「伝統式」によれば3つのタイプに分類され、そのうち②と③が異形態をもつ。その条件とは、②は母音語幹(≒語幹も)か子音語幹か、③は陽母音語幹か陰母音語幹か、である。これらの条件と語尾の3つのタイプを組み合わせてみよう。子音語幹用言として、陽母音語幹の받다《受け取る》、陰母音語幹의 먹다《食べる》、母音語幹用言として、陽母音語幹의 오다《来る》、陰母音語幹의 치다《打つ》を例にとる。語尾は①、②、③をそれぞれ -고, -(으)면, -아도 / -어도で代表させる。

① 받-고	먹-고	오-고	치-고
② 받-으면	먹-으면	오-면	치-면
③ 받-아도	먹-어도	오-아도 > 와도	치-어도 > 쳐도

語幹を固定させ、語尾に複数の形を認めるのが「伝統式」である。語幹と語尾の境界をハイフンであらわす。しかし語幹を固定させるといいながらも、実際には上でみた오다や치다のように語幹と語尾が融合してしまう場合がある(融合する部分を太字であらわす)。次に「語基式」の解釈をみてみることにしよう。

① 받-고	먹-고	오-고	치-고
② 받 _o -면	먹 _o -면	오-면	치-면
③ 받 _a -도	먹 _e -도	오 _a -도 > 와-도	치 _e -도 > 쳐-도

「語基式」は語尾を固定させ語幹に複数の形を認める方式である。つまり으, 아, 어は語幹に所属するので、①、②、③の語尾はそれぞれ -고, -면, -도となる。「語基式」では語幹と語尾の境界がつねにあきらかである。両者のちがいをまとめると表1のようになる。

表1 「伝統式」と「語基式」の語幹と語尾の比較（正格用言）

	語 幹	語 尾	備 考
「伝統式」	形態は1種類	形態が1種類のもの と2種類のものがある。	語幹と語尾が融合して、境界を設定しえないものがある。
「語基式」	形態は3種類	形態は1種類	

2.2. 変格用言の場合

両者のちがいは変格用言⁽⁷⁾の場合さらに明確になる。ㄷ変格用言듣다《聞く》, ㄹ変格用言짓다《作る》, ㅁ変格用言덥다《暑い》, ㅂ変格用言《呼ぶ》についてみてみよう。まずは「伝統式」の場合である。

- | | | | |
|--------|------|-------------|-------------|
| ① 듣-고 | 짓-고 | 덥-고 | 부르-고 |
| ② 듣-으면 | 짓-으면 | 더우-면 | 부르-면 |
| ③ 듣-어도 | 짓-어도 | 더우-어도 > 더워도 | 부르-어도 > 불러도 |

ㄷ変格用言およびㄹ変格用言では語幹が交替する。「伝統式」は語幹を固定させる方式であるが、それにもかかわらず語幹が交替するものを変格用言の特徴とみなすことができるから、語幹の交替そのこと自体はここでは問題にはならない。南基心・高永根（1993）では変格用言を3つのタイプ、すなわち語幹が不規則なもの、語尾が不規則なもの、語幹と語尾の両者が不規則なものに分類しているが、ここであげたㄷ変格用言、ㄹ変格用言、ㅁ変格用言、ㅂ変格用言はいずれも第一のタイプに属するものである。なおㅁ変格用言とㅂ変格用言は正格用言でも一部みられたように語幹と語尾が融合してしまう。

特に問題になるのはㅁ変格用言の場合である。南基心・高永根（1993:142）ではいったん「ㅁ終声をもつ用言の中には母音語尾の前でそのㅁが오や우に替わるものがある」としながらも、「文字上では오(우)だが実際の発音は /w/ である」とし、pとwが交替するものとみている。ふるくは朴勝彬（1995:265-267）が指摘し、裴株彩（1993:79）でも言及されているように、「伝統式」では、ㅁ変格用言において、正格用言굽다《曲がっている》の語形である굽-으면と

並行的な分析をおこないえないのである。しかも더우면을더 w-으면と分析し、w と으가融合して우になるとみるのであれば、더위도는더우-어도ではなく더 w-어도와解釈すべきであるということになり、いずれにせよ、으の存在を説明することができなくなってしまうのである。次に「語基式」による分析をみることにしよう。

- | | | | |
|--------|------|-------|---------------------|
| ① 들-고 | 짓-고 | 덥-고 | 부르-고 |
| ② 들으-면 | 지으-면 | 더우-면 | 부르-면 |
| ③ 들어-도 | 지어-도 | 더우어-도 | > 더워-도 불리어-도 > 불려-도 |

「語基式」では語幹と語尾の境界はつねにあきらかである。続けて他の変格用言についてみておこう。하變格用言하다《する》, 러變格用言이르다《至る》, ㅎ變格用言빨강다《赤い》をまず「伝統式」によって分析すると以下のようになる。

- | | | |
|------------|-------|-------------|
| ① 하-고 | 이르-고 | 빨강-고 |
| ② 하-면 | 이르-면 | 빨가-면 |
| ③ 하-여도(해도) | 이르-러도 | 빨가-아도 > 빨개도 |

하다《する》と르變格用言は南基心・高永根(1993)の第二のタイプである。하다《する》は③では-여도という語尾をもつものと処理され、해도という形をとると語幹と語尾が融合するが、母音トとㄱがㄱになるという変則的な融合である。また러變格用言は南基心・高永根(1993:147)では③の-아도/-어도가-러도となるものと解釈されている。

ㅎ變格用言は第三のタイプである。南基心・高永根(1993:149-150)では②は語幹のみが変化するものとみるが、③は語幹のㅎが脱落した上に語尾の母音トが語幹母音のトと融合してㄱになるという、これもまた変則的な融合をおこす。これらは「語基式」では以下のように分析される。

- | | | |
|-------------|-------|------|
| ① 하-고 | 이르-고 | 빨강-고 |
| ② 하-면 | 이르-면 | 빨가-면 |
| ③ 하여-도(해-도) | 이르러-도 | 빨개-도 |

「伝統式」には一部の変格用言で語尾に不規則なもの、語幹と語尾の両者が不規則なもの（語幹と語尾が変則的な融合をするもの）が存在するのを上でみたが、これらの不規則な形はすべて으, 아, 어の範囲内でおさまるから、「語基式」では不規則な語尾がいついあられることがない。そして語幹と語尾が融合することがないから、その境界はつねにあきらかである。両者の異形態の有無をまとめるとおおよそ以下の表2のようになる。

表2 「伝統式」と「語基式」の語幹と語尾の比較（変格用言）

	語 幹	語 尾	備 考
「伝統式」	形態が1種類のもの と2種類のものがある ⁽⁸⁾ 。	形態が1種類のもの と2種類のものほ か、4種類のものがある ⁽⁹⁾ 。	語幹と語尾が融合し て、境界を設定しえ ないものがある。
「語基式」	形態は3種類	形態は1種類	

ここで「伝統式」の語尾が4種類あるというのは、③に関してである。すなわち、하変格用言, 리變格用言では、たとえば-아도/-어도가それぞれ-여도, -러도となることを指している。学習書などにおけるこれら異形態の表示方法はさまざまである。-아도あるいは-어도で代表させるもの、-아도/-어どのように母音調和による異形態を並記するものが代表的だが、-아도/-어도/-여どのように하變格用言につく語尾をも含めて表記する場合もある。しかしそれであれば-아도/-어도/-여도/-러どのように記さなければ一貫性のある記述とはいえないであろう。

それでは次に「語基」についてその詳細をみていくことにしたい。

3. 「語基式」の概要

3.1. 「語基」とは

菅野裕臣（1997：1）であきらかにされているように、「語基」というのは「前間恭作（1924）のいわば日本の国文法の活用形にあたる概念」を河野六郎

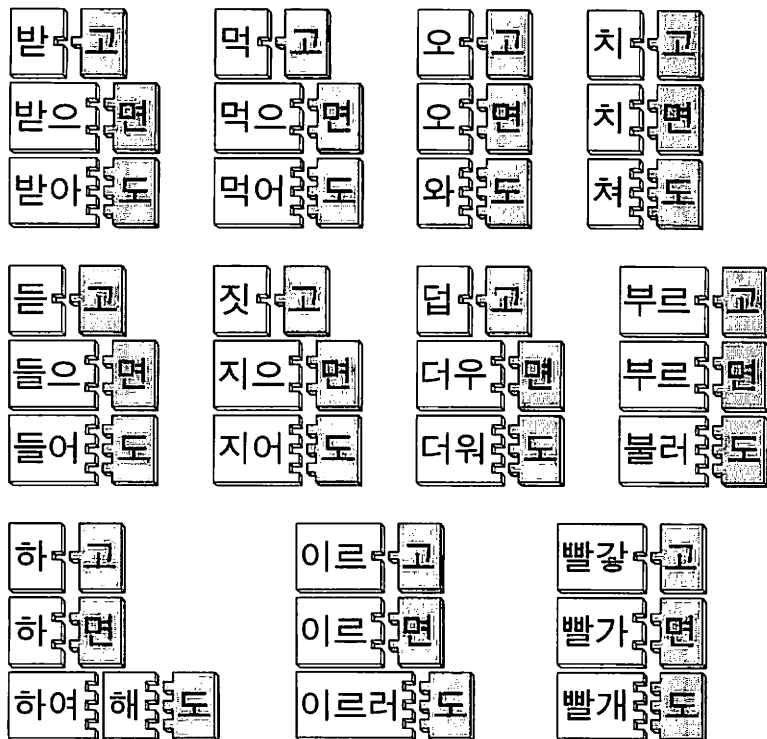
(1955)などが体系化したものである。「語基」に関する先行研究には菅野裕臣(1997)があり、「語基」にもとづいて書かれた学習書には菅野裕臣(1981), 朝鮮語学研究会編(1987)などがある。菅野裕臣ほか編(1988)は「語基式」による唯一の朝鮮語辞典である。後述する他の学習書との比較検討にあたっては, おもにこの2つの学習書に依拠することにする。

「語基式」は語幹に複数の形を認める方式であり, 먹다《食べる》は前述のように 먹-고, 먹으-면, 먹어-도のように語幹と語尾がわけられるから, 語幹に 먹, 먹으, 먹어 という3つの形をもつことになる(そのかわり語尾が1つに固定される)。この 먹, 먹으, 먹어가「語基」であり, それぞれを第Ⅰ語基, 第Ⅱ語基, 第Ⅲ語基と呼ぶ(習慣的にローマ数字を用いる)。そして語尾-고, -면, -도가それぞれ第Ⅰ語基, 第Ⅱ語基, 第Ⅲ語基のあとにつくことをⅠ-고, Ⅱ-면, Ⅲ-도のようにあらわす。

母音語幹用言の場合は次のようである。오다《来る》は오-고, 오-면, 와-도のように分析されるから, 第Ⅰ語基, 第Ⅱ語基, 第Ⅲ語基は오, 오, 와のように第Ⅰ語基と第Ⅱ語基が同じ形になり, 가다《行く》は가-고, 가-면, 가-도であるから, 第Ⅰ語基, 第Ⅱ語基, 第Ⅲ語基は가, 가, 가のように3つの語基がすべて同じ形をとることになる。「語基式」とはこのように語尾を基準をおいて語幹を決定する方式である。

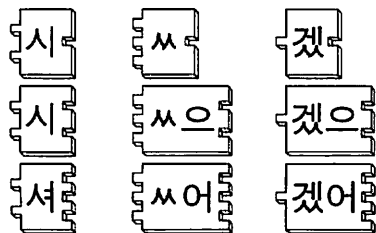
3.2. 「語基」視覚化のころみ

「語基式」はしかし「わかりにくい」という批判がたえない。菅野裕臣(1997: 9)は「われわれの今までの経験では語基説は確かに学生たちの理解を得るのに時間がかかるが, 一旦修得してしまうと語形の作り方が極めて正確で, また学生たちも語基説の方がすぐれていると主張する」と述べている。その「わかりにくさ」は, 筆者の経験では母音語幹用言において第Ⅰ語基と第Ⅱ語基(場合によっては第Ⅲ語基も)が同じ形をとること関連するようである。筆者は大学の授業において, 以下のように「語基」を視覚化して理解を高めるころみをおこなっている。2003年1月から3月までNHKラジオ朝鮮語講座(アンニョンハシムニカ〜ハングル講座〜)応用編を担当したときにも同じ方式を使用した(内山政春(2003a))。前述の「語基式」による正格用言と変格用言の例をこの方式で示す。



このように語幹と語尾を切り離し、色を区別することにより、語幹と語尾の境界の識別を容易にした。また語幹の切り欠きと語尾の突起の数は第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基をあらわし、両者の数が一致するよう、パズルのように組み合わせる方式をとることによって、どの語尾が第何語基につくかがあらかじめ決まっていることを視覚的に理解できるようにした。

なお「伝統式」において-(으)시-, -겠-, -았-/어-, -았-/었-などと表記される形(韓国で先後末語尾と呼ばれるもの)は菅野裕臣(1981)、朝鮮語学研究会編(1987)などで接尾辞と呼ばれ、それぞれⅡ-시-, Ⅰ-겠-, Ⅲ-았-と表記される(内山政春(2003a)では補助語幹とする。以下本稿では補助語幹と呼ぶことにする)。これらもやはり第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基をもつ。これらをやはりカードで示せば以下のとおりである。補助語幹を薄い灰色で示すことにする。「語基式」ではその名のとおり補助語幹を語幹の一部とみなす。



3.3. 「語基式」の用語の整理

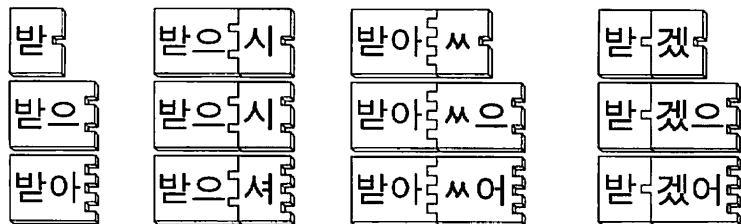
「語基」と混同しやすい概念に「語根」と「語幹」がある。それらを明快に説明した学習書が朝鮮語学研究会編（1987）である。これにもとづいてそれらの概念を整理すると以下のとおりである。

まず「語幹」とは「語尾」に対立する概念である。白いカードが「語幹」、濃い灰色のカードが「語尾」である。



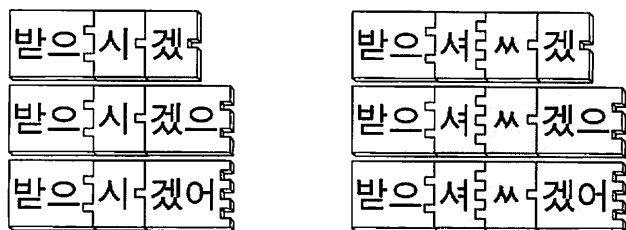
「語幹」には3つの形があることになる。その1つ1つの具体的な形を「語基」という。換言すれば「語幹」とは第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基を統合した、いわば抽象的な概念である（語幹＝第Ⅰ語基ではない！）。そしてここでの第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基の共通部分を「語根」と呼ぶ（ここでは第Ⅰ語基＝語根である）。語基は語根に「語基を作る母音」（第Ⅰ語基：∅，第Ⅱ語基：으，第Ⅲ語基：아/어）をつけてつくられる。これらを菅野裕臣（1981：226）では「語基形成母音」と呼んでいる。

「語基式」での語幹と補助語幹の関係は次のとおりである。



補助語幹をもたないものを基本語幹と呼び、補助語幹Ⅱ-시-, Ⅲ-ㅁ-, Ⅰ-ㄹ-を含む語幹をそれぞれ尊敬語幹、過去語幹⁽¹⁰⁾、蓋然性語幹と呼んでいる(補助語幹を含む語幹を菅野裕臣ほか編(1988:1017)では「用言の拡大された語幹」と呼ぶ)。

補助語幹が複数用いられることもある。その一端を示しておこう。



このように「語幹」はすべて第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基をもつ。つまり「語幹」は第Ⅰ語基でもあり、第Ⅱ語基でもあり、第Ⅲ語基でもあるのであって、くりかえすが、決して第Ⅰ語基が「語幹」なのではない。尊敬語幹、過去語幹のように、ある特定の文法的意味をもつものを「語幹」と呼ぶのであり、その「語幹」がうしろに続く他の補助語幹あるいは語尾によって3つのいずれかの形であらわれる、ということなのである。たとえば過去をあらわす補助語幹は実際にはⅢ-ㅁ-, Ⅲ-ㅁ으-, Ⅲ-ㅁ어-の3つのいずれかの形であらわれるのであり、それを便宜上Ⅲ-ㅁ-で代表させて表記するのである。朝鮮語学研究会編(1987:111)の記述は(第Ⅰ語基と第Ⅱ語基の比較)その点きわめて適切である。

では次に「語基式」学習書の記述を、用言の語形全体に関して検討してみることしよう。

4. 「語基式」学習書の検討

4.1. 「語幹」と「語基」

今まで朝鮮語学研究会編(1987)に依拠しつつ「語幹」と「語基」の関係を考察してきたが、ここで代表的な「語基式」学習書で「語幹」と「語基」がどのように記述されているかをみとめることにしよう。

考察の対象とした学習書は朝鮮語学研究会編(1987)のほか次のものを選んだ。菅野裕臣(1981), 権在淑(1995), 松原孝俊ほか(1999), 早川嘉春(2001a), 早川嘉春(2001b), 野間秀樹(2002)である。現在(2003年10月現在)一般に市販されている「語基式」学習書はほぼ網羅しているものとおもう。

菅野裕臣(1981:82)は用言の語幹には第Ⅰ語基, 第Ⅱ語基, 第Ⅲ語基の3種類があると明快に述べている。権在淑(1995:79)は語幹には「3通りの形」があると述べている。早川嘉春(2001b:71)もまた「語幹は基本的な活用形において3種類の形で現われると考えます」と述べている。

ところが松原孝俊ほか(1999:60)では「語基とは何か」の項で「語基=語幹+語基形成母音」と説明している。これはあきらかにあやまりである。第Ⅱ語基の作り方として子音語幹の場合語幹に ㅇ をつけるとあるのも同じくあやまりである(:64)。この著者は語幹=第Ⅰ語基だと誤解しているようにおもわれる。早川嘉春(2001a:34)では, 第Ⅰ語基はすべて語幹と同じ形, 第Ⅲ語基は語幹部分の最後の母音が 아 , 오 の場合に 아 がつくと説明していることから, やはり語幹=第Ⅰ語基だと認識しているものとおもわれる。なお権在淑(1995:80-81)は語幹に3種類があるとしながら, 第Ⅲ語基は語幹に -아か-어 がつくと述べている。このことは早川嘉春(2001b:135)も同様で, 第Ⅰ語基は語幹と同形, 第Ⅱ語基は語幹に ㅇ がついた形, 第Ⅲ語基は語幹に -아ないし-어 がついた形だと説明されている。

野間秀樹(2002:63)は, 用言は「語基+語尾」と分析されるとしている。つまり上でみた語幹と語基のいわば二重構造をとらない(朝鮮語学研究会編(1987)では語尾と同一レベルで対応する概念は語基ではなく語幹であるのは上でみたとおりである)。それにもかかわらず第Ⅲ語基の作り方を「語幹に -아 もしくは -어 をつけた形」としたり(:65), 「語幹末が ㅣ である母音語幹用言」などと述べたり(:67), 第Ⅱ語基の作り方として「語幹が子音で終わるものには ㅇ をつけ」という記述がある(:96)。この著者も語幹=第Ⅰ語基であると認識しているようにみうけられる。何より問題なのは, 野間秀樹(2002)には語幹が何であるかの定義がまったくないことである。

全体的にみて「語幹」がわかりにくい。抽象的概念だからであろう。野間秀樹(2002)はそれを嫌って「語基」を全面に出してしまったのだとおもわれる。菅野裕臣(1981:82)はさすがに「第Ⅰ語基に ㅇ をつけたものが第Ⅱ語基」だと正しく説明しているが, 朝鮮語学研究会編(1987:110)でさえ「第Ⅰ語基

がはだかの語幹の形で、第Ⅱ語基が語幹+으の形」と説明している。菅野裕臣(1981:41)も導入部分では「語尾-다を除いた形を語幹と呼びます」とある。語幹=第Ⅰ語基とは述べておらず、導入部分の便宜的な表現だと理解するにしても、「ㄹ変格用言の語幹の最後の音節はトカトを含みます」という説明(:122)は、語幹=第Ⅰ語基という解釈の上になりたつものだといわざるをえない。

「わかりにくさ」のもうひとつの原因は、母音語幹, ㄷ語幹, 子音語幹という用語にもあろう。この場合の「語幹」は、尊敬語幹, 過去語幹などという場合の「語幹」とはことなる。菅野裕臣(1986a:61)では、語幹は第Ⅰ語基の末音により母音語幹, ㄷ語幹, 子音語幹の3種類があると的確な説明をしており、これらの「語幹」は3種類の語基のうち1種類(第Ⅰ語基)をいわば代表形として便宜的に用いているのだと理解できる。前述した, Ⅲ-ㄴ-, Ⅲ-ㄴ으-, Ⅲ-ㄴ어-をⅢ-ㄴ-で便宜上代表させたのと同じ考え方である。しかしどの学習書もこのような説明をせずに母音語幹, ㄷ語幹, 子音語幹という名称を用いている。これでは語幹=第Ⅰ語基との誤解が生じても仕方がないのではなかろうか⁽¹¹⁾。

4.2. 「補助語幹」のとりあつかい

前述したように「語基式」では補助語幹(接尾辞)を語幹の一部とみなし、「伝統式」ではそれらを「先語末語尾」つまり語尾の一部とみなすのが一般的である。しかし日本で発行された学習書は「伝統式」でありながらそれらを語幹の一部と説明しているものがおおいようにみうけられる。

しかし、すでに多くの指摘があるとおもわれるが、この記述方法は問題がある。받으면の으を語尾に所属させるのが「伝統式」であるのに、받으시면の으が語幹の一部になってしまうからである。ここで으も語尾だとすれば、語尾(の一部)のあとにまた(補助)語幹がくるという矛盾が生じてしまうのである。「伝統式」であれば、韓国の学校文法のように、으はすべて語尾に属するものとみなすべきであろう。

4.3. 「語基」の具体的解釈のちがいがい

「語基式」学習書相互間に「語幹」や「語基」の解釈のちがいがあつたことを上でみたが、ここでは「語基」をもう少し具体的に比較することにしよう。すなわち、ある形を第何語基とみなすのか、教科書によって解釈がことなる、と

いうことなどについてである。

4.3.1. 母音語幹のみにつく語尾

母音語幹につく-ㄷ다を菅野裕臣(1981:82)では「第Ⅰ語基, 第Ⅱ語基のいずれにつくともきめられません」としている。「第Ⅰ語基と第Ⅱ語基のちがいはもっぱら子音語幹を根拠に定められるから, 母音語幹とㄷで終る語幹にのみつく語尾に関しては第Ⅰ語基であるか第Ⅱ語基であるか, 現代語の観点だけでは定められない」(菅野裕臣(1997:11-12))ということである。そこで菅野裕臣(1981)と朝鮮語学研究会編(1987)ではⅠ・Ⅱ-ㄷ다と表記している。早川嘉春(2001a:125)は同じページにⅠ-ㄷ다とⅡ-ㄷ다の両者があらわれる。野間秀樹(2002)では第Ⅱ語基につくものとしている。なお権在淑(1995), 松原孝俊ほか(1999), 早川嘉春(2001b)はこの形式をあつかっていない。

論理的には菅野裕臣(1981), 朝鮮語学研究会編(1987)が正しいといえるが, 記述は煩瑣になる。筆者がこころみたカード式ではあらわしくないので, 内山政春(2003a)では第Ⅰ語基につくものとして処理した。

「伝統式」と「語基式」の対応は, -(으)면のように(으)があれば第Ⅱ語基, -아도/-어도のように아と어의交替があれば第Ⅲ語基, それらがなければ第Ⅰ語基とってよい。「伝統式」での記述で-ㄷ다が-(으)ㄷ다とは絶対に表記されず, また通時的にⅠ-ㄷ다にさかのぼることを考慮するならば, 第Ⅰ語基につくとするのが妥当なところではないだろうか。早川嘉春(2001a)は論外として, 野間秀樹(2002)があえて第Ⅱ語基を主張する根拠は見い出せない(と述べたが, 実はⅡ-ㄷ다とせざるをえない理由がある。それは次項で説明するㄷ語幹と深く結びついている)。

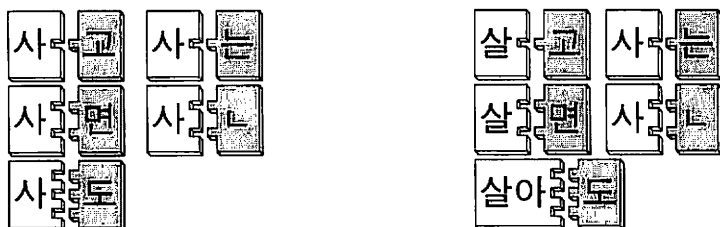
次に-ㄷ니다について述べる。早川嘉春(2001a)が第Ⅰ語基につくものとし, 松原孝俊ほか(1999)が第何語基につくかを明示していないほかは, すべて第Ⅱ語基につくものとしている。

菅野裕臣(1981)と朝鮮語学研究会編(1987)は韓国の正書法で存在詞などでㄹ읍니다のような表記を用いていた当時の学習書であるから, 第Ⅱ語基につくとするのは当然といえる。そして現在でも먹읍니다などの形が規範的ではないといえ完全に消え去ったわけではないだろうから, Ⅱ-ㄷ니다とするのが妥当であろう。早川嘉春(2001a)と早川嘉春(2001b)の解釈がことなるのは, 後者の改定前の初版である早川嘉春(1986b)が旧正書法によるものなので,

その解釈を引き継いだものと考えられる。

4.3.2. ㄷ 語幹のㄷが脱落する語尾

第Ⅰ語基が終声ㄷでおわる用言を子音語幹に含めず別途にㄷ語幹を設定し、しかもㄷ語幹を正格用言としてあつかうことについて「語基式」学習書は共通している。母音語幹用言사다《買う》とㄷ語幹用言살다《暮らす》のそれぞれ3つの語基を確認しておく。菅野裕臣(1981)および朝鮮語学研究会編(1987)の方式をカードで示すことにする。ㄷ語幹用言の第Ⅰ語基と第Ⅱ語基は特定の語尾の前でㄷが脱落した形をとる。



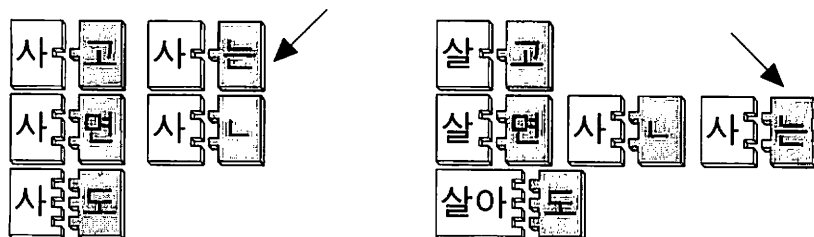
松原孝俊ほか(1999)と早川嘉春(2001a)も基本的には同じ考え方だが、早川嘉春(2001a: 34)はㄷの脱落が第何語基でおこるか説明されておらず、Ⅲ-서の前でもㄷが落ちるかのように誤解される余地がある。

それらと解釈がことなるのが権在淑(1995)、早川嘉春(2001b)、野間秀樹(2002)である。これらはㄷ語幹のㄷの脱落が第Ⅱ語基でのみおこるものと考えている。つまり살다《暮らす》の第Ⅰ語基はつねに살で、第Ⅱ語基にのみ살と사의2つの形があるということである。いいかえれば、ㄷの落ちた形をすべて第Ⅱ語基とみるというわけである。

この方式は、管見によれば早川嘉春(2001b)の改定前の初版である早川嘉春(1986: 71)がもっとも古い⁽¹²⁾。第Ⅰ語基でㄷの脱落形を認めないのは、「基本形から-다を除いた形」が第Ⅰ語基であるという公式に例外をつくるのを嫌ったためだと考えられる⁽¹³⁾。

そうすると菅野裕臣(1981)などで第Ⅰ語基につく-는, -는지, -느냐など(つまりⅠ-ㄴ-に由来するもの)は、権在淑(1995)などでは第Ⅰ語基にㄷの脱落した形を認めないため第Ⅱ語基につくことになる。たとえば菅野裕臣(1981)で第Ⅰ語基につく-는を、野間秀樹(2002: 163-164)では「ㄷ語幹は

ㄹ이落ちた第II語基につく」としてI-는とII-는の両者の形を認めている¹⁴⁾。カードで示すと以下ようになる。



つまりこの方式では、菅野裕臣(1981)などで第I語基につく語尾のうちㄹ이が脱落するものすべてに、第I語基につくものと第II語基につくものを以下のようにいちいち設定しなければならない¹⁵⁾。

菅野裕臣(1981)など

I-느냐
I-느라고
I-는
I-는가
I-는군
I-는데
I-는지
:

野間秀樹(2002)など

I-느냐 (ㄹ語幹の場合はII-느냐)
I-느라고 (ㄹ語幹の場合はII-느라고)
I-는 (ㄹ語幹の場合はII-는)
I-는가 (ㄹ語幹の場合はII-는가)
I-는군 (ㄹ語幹の場合はII-는군)
I-는데 (ㄹ語幹の場合はII-는데)
I-는지 (ㄹ語幹の場合はII-는지)

:

今までみてきたように、「語基式」とは語幹に3つの形、すなわち「語基」を認めるかわりに、語尾を固定する方式である。にもかかわらず語尾に2つの形を設定することによって体系を煩雑なものにしている。これでは何のための「語基式」なのか理解することができない。

筆者の考えでは、このような煩雑さだけでなく、より根本的な理由から野間秀樹(2002)などの分析方法は誤りだとおもう。

まず「語基式」は語尾に基準をおく考え方だということである。再度確認すると、語尾の共通部分を取り出し、残った部分をパターン化したものが語幹の3つの形、つまり語基である。換言すれば、形の決定は、語幹よりも語尾が先行

するのである。먹으면의 먹으는으がつくから第Ⅱ語基なのではない。-면の前にくるから第Ⅱ語基なのである。だからこそ가면의가を第Ⅱ語基だと判断することができるのである。同様に, 아는의아は, 아という形が基準になるのではなく, -는が第何語基につくかを먹는などから確定し, その結果として아は第Ⅰ語基だと結論づけられるのである。ㄷ語幹の場合だけ第Ⅱ語基につくという発想は, -면は母音語幹では第Ⅰ語基に, 子音語幹では第Ⅱ語基につくという発想と同じであり⁽¹⁶⁾, 「語基式」としては手続き的に誤りである。

次に「伝統式」との対応関係である。上で述べたように, 「伝統式」で異形態をもたない語尾と으を含む異形態をもつ語尾は, 「語基式」ではそれぞれ第Ⅰ語基と第Ⅱ語基に該当する。いいかえれば, -는を第Ⅱ語基につくと判断するためには, 「伝統式」で-(으)는という形を認めていなければならない。それが認められない以上, -는に第Ⅱ語基につく形を設定するのは妥当とはいえない。

第三に, ㄷ語幹用言の性質である。ㄷ語幹用言は, 形態的には第Ⅱ語基で으がつかないという特徴を, 音韻的には語尾が有声音化するという特徴をもつ。これは子音語幹用言ではなく, むしろ母音語幹用言と共通する特徴である。母音語幹用言は第Ⅰ語基と第Ⅱ語基が形態上同一であることに最大の特徴があり, ㄷ語幹用言も上のように母音語幹的性格をもつ。これをまとめると以下の表3のようになろう。

表3 用言(母音語幹, ㄷ語幹, 子音語幹)の形態的, 音韻的特徴

	母音語幹用言	ㄷ語幹用言	子音語幹用言
形態的特徴	終声をもたない	終声をもつ	
		第Ⅰ語基=第Ⅱ語基	第Ⅰ語基≠第Ⅱ語基
音韻的特徴	語尾が有声音化		語尾が濃音化

これらの特徴からみても, ㄷの脱落を第Ⅰ語基と第Ⅱ語基の両方で認めることにより, 第Ⅰ語基と第Ⅱ語基の形態を完全に同一なものにする方が合理的であろう。第Ⅱ語基にのみㄷの脱落した形を認めることは, 上のような体系を破壊することになってしまうのである。

最後に, 野間秀樹(1996:61)の主張する「基本形から-ㄷをとれば第Ⅰ語

基」という公式に関してである。-다の前にくる語幹が第Ⅰ語基であるという事実のみからは、それが第Ⅰ語基の唯一の形であるという結論を導き出すことは論理的にもできない。菅野裕臣(1997:3)が述べているように、ㄷ語幹用言のㄷの脱落は語基とは別次元のものなのである。もし野間秀樹(2002)の方式にしたがうのであれば、中期朝鮮語ではㄷの前でㄷが脱落して알다가아다となること、現代語でも알다시피がしばしば아다시피となることをどのように説明すればよいのだろうか。

菅野裕臣(1981)などと野間秀樹(2002)などとのちがいについて村田寛(2002:139)は「若干の見解のちがいがあるが基本的な概念においてはことならない」と述べている。表面的にはそうかもしれないが、実は上でみたように、両者はㄷ語幹用言の解釈について、語幹を基準にするか、語尾を基準にするかという根本的なちがいがあるのである。「語基」の考え方が語尾を基準にする分析方法である以上、野間秀樹(2002)などの考え方は誤りといわざるをえないのである。

4.3.3. 第Ⅲ語基と「ゼロ語尾」

「伝統式」であれ「語基式」であれ、用言の語形は語幹と語尾によって形づくられる。ところが「伝統式」で-아/-어と表記される語尾(終止形と接続形の両者とも)は、「語基式」では第Ⅲ語基に含まれるため、結果として語尾が存在しないことになってしまう。しかしそれでは語形が語幹と語尾によって構成されるという前提と矛盾してしまうため、「語基式」ではゼロ語尾という概念を用いて、Ⅲ-∅という形を設定している。

ところで菅野裕臣(1986b:58)では「語基のうち単独で用いることのできるものは第Ⅲ語基だけです。第Ⅰ語基と第Ⅱ語基は決して単独では用いられません」と述べている。たしかに表面上はそうだが、「語基」の考え方ではあくまでもⅢ-∅という語尾がついてはじめて語形としてなりたつのであるから、この説明は「伝統式」に引きずられたもので、適当とはいえない。なお本稿でとりあげた学習書はおおむねⅢ-∅を設定しているが、野間秀樹(2002:260)のみは終止形、接続形ともに単にⅢと表記し、ゼロ語尾を示していない。

問題は「伝統式」で-아/-어 있다, -아/-어 보다, -아/-어 주다などと表記される一群の形式、すなわち菅野裕臣(1981)などで「分析的な形」と呼ぶ形式の記述方法である。本稿で考察の対象とした学習書は、菅野裕臣(1981)

をのぞきすべてこれらをⅢ 있다, Ⅲ 보다, Ⅲ 주다などと表記している。つまりゼロ語尾をつけていない。しかしこれら「分析的な形」の構成要素となるのはここでは2つの用言であり、用言はそれぞれ語形をなすのであるから、-아 /-어も当然語幹と語尾をもつものと理解しなくてはならない。오다《来る》を例にカードで比較してみよう。



Ⅲ 있다という表記をカードで示せば左側のようになる。用言語幹（第Ⅲ語基）の直後にまた用言語幹がくることになってしまう。これは右側のカードで示したようにⅢ-∅ 있다と表記すべきである。Ⅲ 보다, Ⅲ 주다も同じようにⅢ-∅ 보다, Ⅲ-∅ 주다とすべきである。菅野裕臣（1981）でおこなわれたⅢ-∅を用いた表記法が、なぜ朝鮮語学研究会編（1987）などに継承されなかったのであろうか。単に表記の煩雑さを嫌ったためであろうか。ちなみに内山政春（2003a）ではⅢ-∅を用いて表記している。

5. 「語基」を支持する理由

それではここで、筆者が「語基式」が「伝統式」よりもすぐれていると考える点を述べてみることにしよう。

まず、語幹と語尾の境界がつねにあきらかなことである。これは辞書の記述などで大きなちがいとなってあらわれる。第Ⅱ語基につく語尾と第Ⅲ語基につく語尾、たとえばⅡ-면, Ⅲ-도などは、「語基式」では1つを見出し語にたてればよいが、「伝統式」ではそれぞれ複数の形を見出し語にたてる必要が生ずる。Ⅲ-도를「伝統式」で正確にあらわそうとすれば、辞書の説明はたとえば次のようになるであろう。

-아도《語幹の最終音節の母音がト, ト, ヌ, ヲであるものにつく。最終音節がトである母音語幹の場合トが脱落する。最終音節が一である母音語幹は一を含む音節の直前の音節の母音がト, ヌである場合につくが、このとき一は脱落する。ㅂ変格用言の場合、語幹末子音ㅂが脱落し、-와도となる。ㅅ変格用言の場合、語幹最終音節の母音がㅍまたはㅅになり、子音ㅅと語尾のㅂが脱落

する。》

- 어도 《語幹の最終音節の母音がㅏ, ㅑ, ㅓ, ㅕ以外のもにつく。最終音節がㅏ, ㅑである母音語幹の場合ㅏが脱落する。最終音節がㅡである母音語幹はㅡを含む音節の直前の音節の母音がㅏ, ㅓ以外である場合、あるいは単音節語幹につくが、このときㅡは脱落する。ㅏ変格用言の場合、語幹末子音ㅏが脱落し、-워도となる。ㅓ変格用言の場合、語幹最終音節の母音がㅓまたはㅕになり、子音ㅓと語尾의가脱落する。》

- 여도 《하다,あるいは하다を含む用言につく。하と여が融合して해となることがある。》

- 러도 《러変格用言につく。》

III- ㄷばかりではなく、第III語基につくすべての語尾と補助語幹について、4つの見出し語⁽¹⁷⁾と上のような煩雑な説明が必要となるのである。第II語基につく語尾についてはこれほどではないにしても、やはり複数の見出し語と変格用言への言及が、すべての語尾について必要となる。この煩雑さは何を意味するのであろうか。

用言の語幹と語尾は、語幹が語彙的な面を、語尾が文法的な面を担当しているとおおまかにいうことができよう。変格用言のいわば「変格性」は語彙的なものである。語尾は変格用言を変格用言たらしめるのに関与していない。そうであれば、その「変格性」を文法的なものとしての語尾にまで及ぼすのは合理的とはいえない。「変格性」は語幹が受け持つべき、つまり語幹の内部で吸収すべきものなのである。南基心・高永根(1993)では変格用言のタイプを分類するにあたり、前述のように、語幹が不規則なもの、語尾が不規則なもの、語幹と語尾の両者が不規則なものに分類しているが、これを「語基」を支持する筆者の立場からみれば、語幹に含めるべき「変格性」を語尾にまで及ぼしたためにおこなわざるをえない、本来不必要な分類だと考える。上でみた「伝統式」の語尾の記述の煩雑さは「語基式」によって解消するのである。

ただし、特に朝鮮語母語話者からの「語基」反対論として、次のようなものがありうるだろう。

まず、語尾が第何語基につくかをいちいち覚えなくてはならない、という主張がある。しかし非母語話者にとって、語尾が으を含むか、아/어を含むか、この両者とも含まないかはいちいち覚えなければならないのであるから、まっ

たく同じことである。

次に、語幹に3つの形を設定することはかえって煩雑だという意見がある。しかしこれは、語尾に複数の形を設定する（しかも、前述のように形が単数のものと複数のものがあり、複数のものもその数がことなりうる）必要がないのであるから同じことであるし、語幹は3つの形、語尾は1つの形ときまっている方がはるかに簡潔であろう。また、3つの形を設定することで記憶に負担がかかるという意見に対しては、「伝統式」では同じことを語幹と語尾にまたがっておこなうのだから、語尾という要素が増えただけかえって煩雑になるということができる。

さらに、「伝統式」では語尾である -아/-어 を語幹に所属させるのであれば、なぜこれだけを語幹と認めるのか、という主張がある。しかし朝鮮語の語幹と語尾の結合に3つのタイプがあるのは「伝統式」と「語基式」のどちらを支持するかとは無関係な否定できない事実である。ある韓国の辞書は、活用形として -아/-어 と -(으)니 のついた形を見出し語に提示している。たとえば *넘다* 《超える》であれば [넘어, 넘으니] のように (国立国語研究院 (1999))。見出し語それ自体 (基本形) とあわせ、第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基につく語尾をそれぞれ1つずつ表記していることになる。これは、語幹と語尾の結合には3つのタイプがあることを「語基」という概念なしに認識していることを意味するのである⁽¹⁸⁾。

6. おわりに

これまで「語基」の概略、そして「語基式」と「伝統式」との比較、また「語基式」学習書の記述には「語基」を正確に理解していないものがあることなどを述べてきた。さらに「語基式」が「伝統式」よりもすぐれていると筆者が判断する点、予想される反論についても言及したが、本稿は原則として現代朝鮮語のみを対象にしたものであるから、その意味で本稿は「語基」をめぐる筆者の中間報告的なものとならざるをえなかった。通時的な視点を含む分析は今後の課題としたい。

注

- (1) 本稿の一部は、2つの口頭発表、すなわち内山政春(2000)および内山政春(2003b)を骨子としている。
- (2) 過去においては朴勝彬(1935)のように「語基」と一面共通した分析方法がみられた。また日本以外での海外でも、Холодович(1954)やLewin(1970)のように「語基」ときわめて類似した見解をとるものがある。これらについては内山政春(2000)で簡単に触れたが、これらの詳細な分析はあらためておこないたい。
- (3) 朝鮮語の学校文法は南基心・高永根(1993)に依拠する。
- (4) 南基心・高永根(1993:127)参照。
- (5) 南基心・高永根(1993:128)参照。
- (6) 「語基式」とともに長谷川由起子(1998:154)の用語。
- (7) 変格用言の範囲は菅野裕臣(1981)に依拠する。
- (8) ㄹ 変格用言は語幹の解釈によっては(덩-고, 더 w-으면, 더우-어도)形態が3種類となる。よってここの記述は「形態が1種類のもの、2種類のもの、3種類のものがある」となる。
- (9) ㄹ 変格用言の語幹の解釈によっては(덩-고, 더 w-으면, 더 w-어도)形態が5種類(-아도/-어도/-여도/-리도/-으어도)となる。また体言につく-라도の-라を指定詞の第Ⅲ語基と解釈することも可能であるので、その場合形態がさらに1種類増えることになる。
- (10) 過去語幹は2つかさねて用いることが可能である。菅野裕臣ほか編(1988:1017)では過去語幹が1つのものを「過去(1)」、2つかさねたものを「過去(2)」として区別している。
- (11) 実は河野六郎(1955:392-393)においても「語幹」は2つの意味で用いられている。「接尾辭若しくは語尾がつく時、語幹はその接辭或は語尾の種類によつてそのつく語幹の形が異なる」では「語基」の意味(それを活用形と呼んでいる)であり、「開音節語幹即ち母音で終る語幹の場合は「つなぎの母音」を一般には必要としない」では「第Ⅰ語基」の意味で用いられている。
- (12) この著者が担当していたNHKラジオ朝鮮語講座入門編のテキストは、早川嘉春(1985)が「語基式」、早川嘉春(1986a)が「伝統式」、早川嘉春(1987)が「語基式」であり、1985年度は菅野裕臣(1981)と同じ方式だが、1987年度は早川嘉春(1986a)の解釈にしたがっている。試行錯誤をかさねていたものとおもわれる。
- (13) 本稿で言及した以外に、野間秀樹(1988)、権在淑(1992)(この改訂版が権在淑(1995)である)でも第Ⅱ語基でのみ ㄹ が脱落する方法がとられている。これについて野間秀樹(1996:61)は、野間秀樹(1988)、権在淑(1992)、権在淑(1995)と菅野裕臣(1981)とを比較(早川嘉春(1986b)は比較の対象とされ

ていない)した上で「基本形から다をとれば第Ⅰ語基」という、第Ⅰ語基をつくる方法をㄷ語幹の場合にも原則的に統一、第Ⅱ語基にのみㄷが脱落した形と脱落しない形の2つがあるとする」方式だと説明している。

- (14) 早川嘉春 (2001b) はこのような「ㄷ語幹では第Ⅱ語基につく」という記述がないので、ㄷ語幹用言に-ㄷがついた正しい形を導き出すことができない。この点が野間秀樹 (2002) とは厳密にはことなる。
- (15) ただし野間秀樹 (2002) も、たとえばⅠ-네요やⅠ-는데요の項目にㄷ語幹の場合どうなるか説明がなく (:171), また索引に第Ⅱ語基につく形がいつさいのせられていない。権在淑 (1995) もⅠ-는군요にはⅡ-는군요を認めながら (:161) Ⅰ-네요にはⅡ-네요がなく (:159), さらに索引にはいつさい第Ⅱ語基につく形がないところまで同様である。これでは早川嘉春 (2001b) と大差ないといわざるをえない。
- (16) 野間秀樹 (1996:60) は「語基式」の利点として「가요は가다の-다のかわりに-요をつけたものだとみるような誤り」をなくできると主張している。가다の가と가요の가は表面上両者とも가であるため同じ形だと学習者が誤解する余地があるが、語基を用いることによって가다の가は먹다の먹と, 가요の가は먹어요の먹어と並行的に把握できるということであろう。しかし아는지의아 (第Ⅰ語基) と아니까의아 (第Ⅱ語基) を同じ形だとみる態度は、結局これと同じ誤りであるといわざるをえない。
- (17) ここではとりあえず形態を4つとしたが、5つあるいは6つと解釈される可能性があるのは前述のとおりである。
- (18) 内山政春 (1999:164-165) 参照。

参考文献 (本稿で言及したもののみ)

- 内山政春 (1999) 「書評 延世韓国語辞典」『朝鮮学報』172, 朝鮮学会
- 内山政春 (2000) 「한국어 용언 활용의 매개모음을 다시 생각함」第27回国語学会共同研究会発表要旨
- 内山政春 (2003a) 「応用編」『アンニョンハシムニカ〜ハングル講座〜』1-3月号, 日本放送出版協会
- 内山政春 (2003b) 「語基式」教科書にあらわれた文法用語」第17回朝鮮語教育研究会発表要旨
- 菅野裕臣 (1981) 『朝鮮語の入門』白水社
- 菅野裕臣 (1986a) 「語彙と文法, 品詞, 単語の構造」『基礎ハングル』2-2, 三修社
- 菅野裕臣 (1986b) 「用言(2)ー語幹, 語基, 語形(1)ー」『基礎ハングル』2-8, 三修社
- 菅野裕臣 (1997) 「朝鮮語の語基について」『日本語と朝鮮語 下巻』国立国語研究所
- 菅野裕臣ほか編 (1988) 『コスモス朝和辞典』白水社
- 河野六郎 (1955) 「朝鮮語」『世界言語概説』研究社
- 国立国語研究院 (1999) 『표준국어대사전』

- 権在淑 (1992) 『やさしい例文で学ぶ朝鮮語の基本会話』 ナツメ社
- 権在淑 (1995) 『表現が広がるこれからの朝鮮語』 三修社
- 朝鮮語学研究会編 (1987) 『朝鮮語を学ぼう』 三修社
- 南基心・高永根 (1993) 『표준국어문법론 개정판』 塔出版社
- 野間秀樹 (1988) 『길 朝鮮語への道』 有明学術出版社
- 野間秀樹 (1996) 「바람직한 한국어 교재란? - 일본어화자의 경우 -」 『語学研究所論集』 1, 東京外国語大学語学研究所
- 野間秀樹 (2002) 『至福の朝鮮語 (改訂新版)』 朝日出版社
- 裴株彩 (1993) 「현대국어 매개모음의 연구사」 『周時経学報』 11, 塔出版社
- 長谷川由起子 (1998) 「『韓国語学習』 これでどうだ!」 『韓国語をモノにするためのカタログ '99』 アルク
- 早川嘉春 (1985) 「入門編」 『アンニョンハシムニカ〜ハングル講座〜』 4-9月号, 日本放送出版協会
- 早川嘉春 (1986a) 「入門編」 『アンニョンハシムニカ〜ハングル講座〜』 4-9月号, 日本放送出版協会
- 早川嘉春 (1986b) 『エクスプレス 朝鮮語』 白水社
- 早川嘉春 (1987) 「入門編」 『アンニョンハシムニカ〜ハングル講座〜』 4-9月号, 日本放送出版協会
- 早川嘉春 (2001a) 『新版 メモ式朝鮮語早わかり・CD付』 三修社
- 早川嘉春 (2001b) 『CDエクスプレス 朝鮮語』 白水社
- 朴勝彬 (1935) 『朝鮮語学』 朝鮮語学研究会
- 松原孝俊ほか (1999) 『ポイントレッスン入門韓国語 改訂版』 東方書店
- 前田恭作 (1924) 『龍歌故語箋』 東洋文庫論叢
- 村田寛 (2002) 「한국어 용언 활용의 기술방법에 대하여」 『形態論』 박이정
- Lewin (1970) "Morphologie des Koreanischen Verbs", Otto Harrassowitz
- Холодович (1954) "Очерк грамматики корейского языка", Издательство литературы на иностранных языках

(朝鮮語学・国際文化学部専任講師)